

イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である。食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」と言われた。—(中略)— 三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロは、イエスが三度目も、「わたしを愛しているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」イエスは言われた。「わたしの羊を飼いなさい。はっきり言っておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。」ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして、イエスはこう言われたのである。このように話してから、ペトロに、「わたしに従いなさい」と言われた。—ヨハネ21章—

## 「私を愛しているか」

キリストの教えを広めている使徒たちを尋問し、その布教を禁じた宗教指導者、大祭司の心にあったのは、自分たちの支配力が弱まることへの恐れでした。イエスの教えが “**聖職者たちが作り上げた規則や典礼に従うことで義務付けられ、がんじがらめにされてきた人々を解き放つもの**” であったからです。

イエスにとって宗教とは、「人は神の子であって、自由な心で神の意図された美しい人々となるよう教えるもの」でした。これは、法令規則で定めたからと言って出来るものではないのです。

時に、宗教の指導者たちが陥る畏は、人々を管理しようとし、その結果、宗教を一連の規則にすり替えてしまう事のようにです。イエスが使徒たちを任命されたのは、世でいう支配者としてではなく、模範を示して、民全体を慰め、助けを与えて、指導し、人々を神のもとに導くことでした。

真の宗教は、心からくるものです。それは、**神と深い関係を持つこと**によって、人々に**平安と喜びと愛**とをもたらすもの。礼拝は、それが自由になされる時のみ、意味があるものであり、礼拝を守らなければ罪を犯すことになるという、恐れや罰が与えられるといった、脅しのもとに強制された礼拝によって、又、愛を動機としない規則の厳守によって、神が栄光をお受けになることはないのです。神は、ご自身を真に愛する自由な表現のみを喜ばれるからです。これに到達しない者は偽物で、組織が要求することに応えるだけのものにすぎないことを自覚する謙虚さが私達には問われています。これが「地上に信仰を見出すことが出来るだろうか」とイエスを嘆かせた、信仰のない現代の私たちの現実なのですから。

既存の宗教リーダーに変えて、新たに派遣される使徒たちが、真の宗教リーダーになるために、イエスは、ティベリアス湖畔で弟子たちにご自身を現され、三度にわたってペトロに「ヨハネの子シモン、私を愛しているか」と迫るのです。イエスはペトロの弱い過去に反省を促しているのではありません。未来に向かう『今』を問うているのです。過去がどうあれ、今、**イエスを愛して生きるなら**、それが、人々に自由と開放をもたらす真の宗教を世にもたらす、イエスに派遣された使徒とされるからです。

これほどまでにイエスの愛を受けたペトロは、その後、主のために命を捨てるまでの人となるのです。

